

附属校・公立学校との連携事業活動概要報告書

【実践研究課題】国語科授業充実のための学校図書館活用

【研究代表者】須佐 宏 (教職大学院)

【協同研究者】上田 仁 (和歌山市立四箇郷小学校) 米田優介 (和歌山市立四箇郷小学校)
玉置大己 (和歌山市立四箇郷小学校) 小原佑真 (和歌山市立四箇郷小学校)

【はじめに】

和歌山市で初となる学校図書館司書が平成28年度に四箇郷小学校に配置され、同校の学校図書館は常時開放が促進された。司書教諭との連携による国語科の授業実践も行われるようになりつつあった。しかし、今年度、学校図書館司書の配置転換があり、同校から学校図書館司書が引き上げられることになった。同校において軌道に乗りかけていた学校図書館を活用した国語科学習の流れが寸断されかねない状況に、教員はもちろん、高学年児童の中にも不安を口にする姿が見られるようになっていた。

ここでは、そんな状況をうれう6年生の児童と昨年、一昨年と学校図書館を活用した国語科の実践をする先輩教員の姿を目の当たりにしてきた若年教員が、初めて学校図書館を活用した国語科の単元づくりに挑戦した実践を報告することにする。

【実践の概要】本実践は、四箇郷小学校6年2組(担任 小原佑真)で行われたものである。

《単元の構想》

①児童の実態

本学級の子供たちは、昨年度、本の魅力をプレゼンテーションするという学習を行った。そのため、本が好きな子供も多く、読書タイムや休み時間、図書の間には進んで本を読む姿が見られる。しかし、その一方で同じジャンルの本しか読まない子や、絵だけを見ている子、パラパラとページをめくっているだけの子なども見られた。また、授業においては、自分の書きたいことを見つけられない子、何を書いてよいかわからない子、書きたいこと、書きたいおもいがあっても書き方がわからない子など、書くことに課題を持っている子が多い。

そこで本研究では、より子供たちの読書意欲を高められるよう、紹介文を書いて本の紹介をおこなう単元を設定した。

②本單元における相手意識・目的意識の設定

本校には一昨年度まで学校司書が勤務していた。そのおかげもあり、本校の子供たちの読書意欲は高まっているように感じる。しかし、今年度は学校司書が他校に異動となり、学校図書館に以前ほどの活気はなくなった。これは6年生の子供たちも感じていた。そうした子供たちの思いもあり、本單元では、本校のみんなに最高学年として6年生が本を紹介し、本校全体の読書意欲を高めることができればと考え、紹介文を書くという活動を設定した。相手意識は、本校の一年生から6年生の子供たちと先生に向けて、目的意識は、自分たちのおすすめの本を紹介し、本の楽しさを広めるという形で意識の設定を図った。

《市民図書館での本物体験》

第一次では、単元への意欲付けとともに、総合的な学習の時間を用いて市民図書館の見学に行った。子供たちの中には普段から公共図書館に行きなれている子もいたが、ほとんど行ったことがなく、学校図書館しか知らない子もいた。そのため、たくさんの本に触れる機会を設けようと思い、見学に行き、実際に市民図書館の本を借りるという活動を取り入れた。また、この見学のねらいはもう一つあった。それは、自分たちが本單元で本を紹介するに当たり、本のプロともいえる図書館司書の方々がどのようにして本を広めようとしているか、子供たちに気付かせるというねらいであった。子供たちはこの見学を経て、いままでに読んだことのない本を借りて読んでみる子がいたり、一つのテーマで本を集めたコーナーの存在に魅力を感じる子がいたりした。学校を離れて、実際に専門の施設を訪れることに大きな意義を感じた。

【小原実践の実際について】
 《単元計画》 全20時間

	読むこと	書くこと
第一次 「知ろう」 (六時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・読書に関するアンケートから、単元に意欲を持つ。(2時間) ・「森へ」を読み、紀行文と出会う。(1時間) ・自分の読書経験をふり返る。(1時間) 	
第二次 「『読んでみたい』について考えよう」 (七時間)		<ul style="list-style-type: none"> ・低・中・高・大人の中から相手を決め、4種類の教材から1つ紹介文を書く。(3時間) ・同じ相手に書いたグループで話し合い、紹介文を改善する。(1時間) ・違う相手に書いたグループで話し合い、紹介文を改善する。(2時間) ・話し合ったことをもとに、紹介文を仕上げる。(1時間)
第三次 「『読書ストリート』でおすすめ、この本おもしろいよ」 (七時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・二学期・三学期に学校図書館をどのようにしていくか話し合う。(1時間) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第二次の紹介文をもとに、「読んでみたい」と思わせる紹介文について考える。(1時間) ・紹介文を書く相手と本を決め、紹介文を書く。(2時間) ・違う相手に書いたグループで話し合い、紹介文を改善する。(2時間) <ul style="list-style-type: none"> ・添削する。(1/2) ・話し合い、紹介文を改善する。(2/2 本時) ・話し合ったことをもとに、紹介文を仕上げる。(1時間)

総合的な学習の時間

- ・市民図書館に見学に行く。
- ・前年度の学校司書がおこなっていた取り組みを知る。
- ・代本板より他学年の読書状況を調査する。

☆総合的な学習のねらい

- ・本に興味を持つ。
- ・本を読んでもらうためにどのような工夫がされているか知る。

図書室につながるろうか6年生のおすすめ本コーナーを並べ、「読書ストリート」にする。

・おすすめ本のコーナーを作る。

[単元の実際]

(1) 第一次 知ろう

第一次では、学校図書館の現状について子供たちが知ることから始め、子供たちが学校図書館をもっと活気のある場所にしたいと思えるよう考えた。また、自分の読書経験を振り返ることで、自分と本との関わりについて知り、人によって読書経験に違いがあることや自分がどのようにして様々な本と出会ってきたのか、自分の読書にどのような傾向があるのかなどに気づいた。また、朝の会などの時間を使い、私も本の紹介をおこなった。本の紹介が読書意欲を高めるということを、本学級の子供たちにも実感させるためだ。紹介した本は、教室の後ろに並べるようにしていたのだが、休み時間には常に誰かが読んでいたり、家に持って帰って読んでいいか聞いてくる子がいたりした。また、紹介した本を読んだ子が、また別の子に面白かったと話すことで、どんどん読む子が増えていく様子も見られた。そうした姿から改めて本の紹介が持つ良さを感じた。

(2) 第二次 『読んでみたい』について考えよう

第二次では、既習の教材の紹介文を書いた。この際、低学年向けには低学年の教材を、用意し、紹介する相手と本の内容がかけ離れないように注意した。また、物語文だけでなく説明文なども選択肢に用意した。そうすることで、ただ紹介文を書くだけでなく、第三次で自分のおすすめしたい本を紹介する際の手掛かりとなると考えたためである。実際、第二次で紹介文を書いた経験や、相互添削で受けたアドバイスを生かし、第三次の活動に取り組む姿も見られた。また、できた紹介文を廊下に置き、相互添削の際のグループの紹介文だけでなく、学年全体の子の紹介文に触れることができるようにしたことで、そこからの学びも大きかったように感じる。



(3) 第三次 『読書ストリート』

でおすすめ、この本おもしろいよ

第三次では、自分のおすすめしたい一冊をおすすめしたい相手に紹介するという活動をおこなっていった。思い入れのある本やお気に入りの本を紹介するため、第二次以上に意欲的に紹介文を書いていた。また、第二次で一度書いて、グループで意見を交流しているため、子供た

ちは紹介する相手の学年をしっかりと視野に入れて紹介文を書くことができていた。しかし、その一方で第二次とは異なり、他の子が紹介している本を読んだことがない子が多かったため、相互添削の際に、文章の語尾や漢字表記を直すなどにとどまり、内容や構成については中々意見が出なかった。あらかじめ、読書タイムなどを利用し、同じグループの子の分だけでも、他の子が紹介している本を読む時間を設けていればもっと話し合いが活発になっただろうと感じる。

[本実践を振り返って]

本単元づくりを通してたくさんの方のアドバイスを、たくさんの先生方から教えていただいた。例えば、単元を組み立てる際には、本屋や図書館など、自分が作ろうとしている単元に関する専門家に接することやそのやり方に触れること、実際に自分の目で見て、自分でやってみるということが大切だということである。もし、図書館や本屋に行ったり、実際に紹介カードを作ったりしていなければ、子どもたちが何を目標にすべきなのか、どんなゴールを見据えさせればいいのかかわからなかっただろう。また、単元づくりの過程で教えていただいた「単元計画は、プランではなくプロジェクトだ」という言葉も自分にとって、胸に刺さる言葉であった。単元全体の活動の流れが通るように、毎時の授業に意味があるように作ることができたと感じても、それはあくまで予定に過ぎず、実際にやっていく中で適宜修正を加えることが必要だと、本単元で強く感じた。これまでの自分は、単元を作ってしまったら、あとはそれを行っ

ていだけであったため、今回修正を加えながら進めていくことの大切さを感じた。しかし、本単元づくりを通じて、今後自分が克服していかなければならない課題も見えてきた。

一つ目は、様々な授業を知ることである。色々な先生方の授業を見させていただいたり、授業について他の先生方に相談したりすることで、様々な授業のアイデアや方法を学んでいく必要があると感じた。

二つ目は、もっと単元全体を見据えながら授業を作ることである。この点については、今回の単元づくりにおいても、何度も教えていただいた。単元全体の見通しを持って、毎時間毎時間を考えていくということが、私はまだまだできていない。

三つ目は子どもの視点に立って単元を考えることである。この点も今回かなり意識したつもりではあったが、授業をしてみて、ここは子どもたちの中に知識として定着していなかったな、ここはこうした方が子どもたちは考えやすかったのではないかな、という指導をいただいた。（小原）

これまでに自分は子どもが「やりたい」「やってみたい」「おもしろそう」と思えるような単元を作ろうと意識して単元づくりに挑戦してきた。また、単元の中の学習活動が、子どもたちにとって必要であるかどうかを考え、学習を進めていけるようにしてきた。そこで今回、小原先生が単元づくりをしていく中でも子どもの活動をイメージしながら単元や授業を作っているような助言やサポートをしていこうと思った。しかし実際に単元づくりに関わってみて、自分以外の人の単元づくりに関わることがこれほど難しいのかと痛感させられた。

まず、授業者である小原教諭自身、「何をしたいのか」を見つけることができていなかった。そんな中で、単元づくりについて、須佐准教授や米田教諭を交えて単元づくりの協議を進めたが、単元の構想をイメージすることが難しい様子が見て取れた。なかなかよい案が見つからず、悶々とした日々を過ごすことになった。そんな中で、この6年生の児童を私が昨年度担任したときにおこなった「学校図書をプレゼンする」という単元の続編のような形で学校図書館を活性化させるような活動を提案してみた。小原教諭も、本についての思い入れがあり、そこでようやく単元づくりの方向性が定まった。単元の方向性が決まると、何をすべきかが見え、それに向けて毎日準備をしたり、教材研究をしたりする日々が続いた。子どもたちが本や図書に関心が高まるような仕掛けもたくさん用意していった。

今回、学年主任として、小原教諭の単元づくりをサポートしてみて最も感じたことは、これまで、自分の単元を自分の思いを中心に組んできたが、いざ自分以外の先生の授業となると、どこまで口を出していいのかということであった。最初は小原教諭の経験のために・・・と思い、「自分で考えて単元を作ってみよう。」と励まし、見守ることに重点を置いていたため。そのことで、結果的になかなか単元づくりに着手できず、多くの時間を費やさせてしまった。もっと初期の段階で、小原教諭の困り感を感じ取り、適切な助言やアドバイスをしていれば、教材研究にあてる時間を増やすことができたのだろうと反省する。小原教諭が悩みながら自力で単元を組んでいる様子を目の当たりにし、単元を組んでいくには、やはりある程度の知識や経験が必要なのだと改めて実感させられた。

今回、小原教諭の単元づくりに関わってみて、単元づくりはもちろんであるが、若手教員の単元づくりに関わる時は、状況を常に見極めながら、適切なサポートをしながら、共に学んでいくような姿勢が必要であると痛感した。（玉置）

平成28年度、平成29年度と学校図書館司書の協力を得ながら、私自身、3年生と6年生で学校図書館を活用した単元づくりに挑戦させていただいてきた。今年度は、和歌山大学教職大学院で学びながら、少し離れたところから学校や各学年の業務や教材研究に関わることができるようになった。また、これまで3年に渡り本校の国語科教材研究に指導や助言を頂いていた須佐准教授との連携がよりスムーズかつ密なものになった。そのメリットを活かし、須佐准教授からのヒントを各学年と共に考えたり悩んだりする機会をいただくことができた。6月には、私自身もそうであったように、採用3年目の教員である小原教諭が単元を構成することがこれほど根気の要るものであり、苦心するものであったのかということを実感させられた。小原教諭の様子からは、「これまでの四箇郷小学校の取り組みの流

れに沿うものにしたい」という強い思いが伝わってきたが、いくつか壁があったように感じる。一つは教材解釈の壁である。よく見る文学教材や説明的文章教材ではなく、これまでの自分の読書経験をふり返る単元「本は友達」を選択したことで、本校における先行的な事例も見られず、教科書教材を理解し、それを学校の取組とどう結びつければ良いのかという点に大きな悩みや難しさがあった。また、小原教諭は当初から子どもたちに書く力をつけさせたいという思いも持っていた。そのため、「教材の魅力」「学校の取組」「つけたい力」の3つの狭間で揺れ、なかなか方向性を定めることができなかった。二つ目は学年主任の期待という壁である。学年主任の玉置教諭（研究主任）の方には、「このチャンスで小原教諭に力をつけてほしい。」という思いがあった。それは、玉置教諭自身、過去に須佐准教授と共に、教材の魅力を探るところから始める国語の授業づくりを経験し、自身の授業力の向上を実感した経験があったからである。よって、玉置教諭には、「できる限り、小原教諭自身に単元構成を考えさせてあげたい。」「そうすることで自分のものにしてほしい。」という思いがあった。小原教諭にも、その期待に応えなければという思いと、うまく進まない焦りが見てとれた。

その様子を見守る玉置教諭には、どのタイミングで、どこまでアドバイスをすべきかという迷いがあったように思う。できる限り小原教諭にやらせてみたいという思いから、「自分だったらこうする。こうしたい。」というものは持ちつつも、小原教諭の教材解釈や単元構成に寄り添いながら適宜指導や支援を行っていた。なかなかうまくまとまらない様子を察し、「もう言うべきか。」ということ悩んでいた様子もあったが、須佐准教授からの助言を活かして、ある程度単元構成がまとまってきた時期からは、玉置教諭も積極的に単元構成の補正を行いやすくなった。学年主任の一方的なものではなく、小原教諭の思いを尊重しながらより良い選択を共に考えていくという学年での話し合いの様子がうかがえた。

比較的若い教員同士が共に単元を作っていくということは、これまでの「ベテラン主任と若手教員」という学年構成の時に見られたようなベテラン主任の経験によるアドバイスというものが得にくいということがある。しかし若手教員が増加する現在の状況においては、国語科だけでなくどの教科においても、自分たちでより良いものを作っていかなければならない場面があることは確かである。そんな時にどう打開していくかということは現在の学校現場全体で乗り越えていかなければならない課題である。



この単元を実践するにあたり、4月から須佐准教授と単元についての相談が度々行われた。小原教諭と玉置教諭はその都度、和歌山大学へ足を運び須佐准教授の助言を受けた。また、時には須佐准教授が四箇郷小学校へ来てくださり、協議を重ねて一つの単元を形にしていくことができた。この二人三脚で作っていった単元の中で、小原教諭、玉置教諭、そして私自身、三者三様の学びがあった。四箇郷小学校としても、「単元づくりは難しいものである。だからこそやりがいがある。」というよう

な風潮になってきていることも確かである。この、「単元を複数人で構成し吟味していく、分からないことがあればすぐに相談ができる」というような、「学級から学年へ、学年から学校へ、学校から校外へ」という組織としての実践を今後も続けていきたい。（米田）

【終わりに】

和歌山市には、現在義務教育学校を含め51の小学校がある。そのうち22校が教科や領域ごとに教育委員会の研究指定を受け、公開研究授業研修会を行っている。四箇郷小学校は、そういった研究指定を受けているわけではないが、国語科の授業研究を現職教育の中心に据え、数年前からは全員が校内で研究授業を実施し、互いの授業実践を積極的に公開して学び合うような職員集団になっている。そんな中で米田教諭による「すがたをかえる大豆」や

「平和のとりでを築く」を扱った「学校図書館を活用した複合単元実践」も行われてきた。米田教諭によるそれらの授業実践は、いずれも児童が主体的に学習へと向かうための工夫がみられ、児童が生き生きと活動する姿を見ることができた。そんな授業実践に触れてきたことによって、同校の実践経験の浅い先生方を中心に「自分もあんな授業をしてみたい。」という思いが芽生えていることを感じていた。そんな中で、今年度、小原教諭が初めて自分で単元づくりに最初から挑戦するということになり、私も関わらせていただくことになった。小原教諭自身やそれを見守りサポートしてきた玉置教諭、そして米田教諭も述べているように、小原教諭にとっては、大変負荷のかかる挑戦になったかもしれない。しかし、小原教諭は今回の授業実践を通して見えてきた自分自身の課題として、

- 一、様々な授業のアイデアや方法を学んでいく必要があること
- 二、単元全体を見据えながら授業を作ること
- 三、子どもの視点に立って単元を考えること

の3つを挙げている。今回の実践は、小原教諭自身、満足いく実践にはならなかったようであるが、ここでの気づき、学びは今後の小原教諭や小原実践を目の当たりにした同校の先生方の「学校図書館を活用した国語科の授業づくり」へとつながっていくことが予想され、同校に吹き始めた「学校図書館を活用した国語科実践」の風はやむことなく、来年度以降の実践に活かされていくことになることと確信している。四箇郷小学校の先生方の新たな挑戦に今後も関わらせていただきながら、私にできる適切なサポートの在り方についても考えていきたい。（須佐）

